

ドアが閉まる音

sanukisoba

香奈さんと僕の母が知り合った場所は、母のパート先だった。香奈さんが姉と同年で姉と同じように大学3年生だということ、姉と誕生日が同じだということ、既に両親が亡くなっているということ、母は初めて会ってから3日もかからないうちに聞き出していた。そしてそれから3日も経たないうちに母は香奈さんを我が家の夕食に呼ぶようになっていた。

最初の数回こそ遠慮というかどうかどう振る舞っているのかわからず緊張気味だった上にどうお礼をしたらいいのかもわからず「後片付けだけでもさせてください」と言いだして母にやんわり叱られたりしていたけれど、いつの間にか毎週金曜に我が家に来るようになってしばらく経つ頃には姉と母と3人で和気あいあいと過ごすようになり、それなりに楽しい時間を過ごしているようだった。

香奈さんは父母の残した家の家賃収入と遺産とアルバイトで生活費と学費をなんとか捻出する生活を大学に入った頃から続けており、遺産や遺された家の管理をしてくれている親戚もいるというのになぜか親族に頼るのを避けてできる限り一人で暮らそうとしているようだった。そんな香奈さんが我が家にちょくちょく顔を出すようになった理由は母と気が合ったのか姉と気が合ったのかどちらかよくはわからない。姉は姉で、サークルだのゼミだのバイトだのといつも夜遅くに帰ってきていたのに金曜だけは夕方大学が終わるとすぐに帰宅するようになったし、父も金曜はいつもケーキだのプリンだのをお土産で買って帰ってくるようになった。月並みな言い方かもしれないけれど、家族が一人増えたようなそんな賑やかさだった。

毎週金曜限定で家族が増える生活が始まってからどれくらい経った頃だろうか、香奈さんはそれこそ本当にうちの家族だったんじゃないかといえるくらいにまで馴染んでいた。姉とは週末や大学が早く終わりお互いバイトのない日などに会って買い物したり喫茶店に行ったり、映画に行ったり食事に行ったりするようになっていた。僕と違って割合社交的な姉ではあったが、香奈さんと会う回数は他の友人と会う回数とは比べ物にならないくらい多くなっていった。姉が言うには「香奈と話しているのが一番楽しい。いっそうちに住ませちゃえばいいのに」ということだった。

たしかに、そういう話が出たことはある。幸い祖父母が残して僕らが継いだ我が家は、小さい割には部屋数が多く部屋が余っていたし、香奈さんが色々なものを切り詰めて生活をしていることも知っていたからその話を持ちかけたこともある。すると香奈さんは笑顔で、気持ちは嬉しいけれどさすがにそれは迷惑がかかる、切り詰めた生活も半分は趣味みたいなどころがあるし、いつものように遠慮深さを発揮した。一方で就職活動や卒業論文などが視野に入ってきた姉と同学年である以上、彼女にも当然同じような事情はあるわけで、今のままの生活を続けていて大丈夫なのかという不安は彼女自身にもあったようだ。しなきゃいけないことが増えたら全部が破綻するかもしれないのよ、という母と父の説得は1ヶ月ほど続いた。わりとのほほんとしている父が「立ち上がったことを聞かぬ」と彼女の財政状況や今後の考えを聞きながら一番負担にならない方法は何かと悩み、母は手助けをしたと思うつつもあまり手助けしようとする彼女にとって窮屈で面倒なのではないかと悩んでいた。

どちらかといえば他の家族と遊ぶことも少なく、来客も決して多くない我が家だったから、この変化はとても意外なものだった。読書や音楽鑑賞が趣味で他人というよりは一人で過ごすことを好む父と一緒に生活することを勧めたことも意外であったし、母も他人と接すること自体は嫌いではないが深入りするのを避けていたきらいはある。姉も四六時中一緒という友人を作るのが好きなタイプではなかった。そんな家族が香奈さんについては受け入れてもよい、どころか受け入れたいと考えていたのだ。

香奈さんの境遇に同情をしているのかと僕などは最初思っていたが、どうもそれも違うようだ、とわかり始めた頃、香奈さんの方が同居を考えたいという話をするようになった。親族に相談したところ最初は不思議な顔をされたけれど「下宿だと思えばそれも良いのではないか」「生憎私たちは北海道にいて、あなたは関東にいます。あなたが悩んでいるときにそばにいてあげられない。その役割を引き受けてくれる人がいるならば甘えてもいいのかもしれない」などとどちらかといえば一緒に住む方が安心できるというようなことを言われ、決心をしたらしい。

「同居というより、下宿という扱いで構いません。下宿代は払わせてください」と金曜夜の食事が終わった後に申し出てきた香奈さんに、父母は笑いながらお金の話はするもんじゃない、私たちが一緒に暮らしてくださいと言っているのだ、と返す。「でも」と食い下がる香奈さんには母は淡々と話す。

「私たちはね、あなたに恩着せがましいと思われたくはないんだけど、やっぱりお金は取れないわ。幸い部屋は余っているし娘も息子も大学に入ってここで暮らしているけれど生活費も入れてはいない。それなのにあなたからは生活費を取るなんてできない」「でも」

「でも、じゃないの。あなたは私たちにとって家族同然なの。同然、というか家族だと思ってすらいる。お金の話はしないことにしましょ。私がパートに出ているのだからお金のためではなく子供達に手がかからなくなって暇を持て余したから、というだけの理由なんだから」

姉と僕はこういう状態になった母は何を言っても聞かないことを知っていたから、申し訳なさそうな顔をしてなんとかして考えを変えてもらおうとする香奈さんに諦めな、無理だよ、とアドバイスしてあげたい気持ちになっていた。

「でも、それじゃあ」

何を言っても取りつく島のない母に困惑した表情を香奈さんが見せたとき、一向に引かない香奈さんに同じく困惑した母は妥協策を提示した。

「家事を手伝ってもらうことにしたらいいかしら」

我が家では僕も姉も一通りの家事はこなせる。それは幼少期から家事を手伝わされてきたからであり、高校に入った頃から料理もさせられてきたからだ。その名残で今も当然のようにたまに台所に立って料理を作ることもあるし、母に代わって家事をこなすことも多い。つまるところ母は香奈さんに僕や姉と同じ立場になってもらおうとしているということらしい。このような説明を受けて香奈さんはそれでいいんでしょうかと驚き、母はそれでいいと言い、父もそれでいいと言い、僕らは何も言うことはなかった。

しばらくの間逡巡していた香奈さんではあったが、結局その条件で納得をしたようだ。

「わかりました。ありがとうございます。生活費の代わりに家事をお手伝いします」

と話す香奈さんに、父母はわかってくれてありがとう、と言う。けれど、それでも何かを言いたそうな様子を香奈さんは見せる。気になった母がどうしたの、と聞く。

「ただ、私、恥ずかしいことに料理がダメなんです」

大学が夏休みに入り、香奈さんは引っ越しの準備を淡々と進めていたし、我が家も受け入れの準備を淡々と進めていた。今住んでいるところの大家さんとも話し合い、引っ越しは大学の夏休みが終わる頃にするとし、それまでの間香奈さんは母がパートに出る日以外はほとんど母に料理を教わりに来ていた。

料理がダメ、というのはいくらなんでも謙遜だろうと思っていた僕と姉ではあったが、実際彼女の料理を見ていると「これはダメだ」と言わざるを得ないものだった。味覚音痴というわけでもないようだし口にした瞬間卒倒するようなものを出すというわけでもないのだが、とにかく不器用なのだ。卵を破れば必ず黄身が潰れるし鶏肉を焼けば周りが焦げて中がレア、パスタを茹でれば何故か伸びきった状態で出てくるしハンバーグは石のような歯ごたえだった。

大体週3日くらい夕方にやってきて、そこから母と共に台所に立って料理の練習をするから、自然と僕らは週3日くらい香奈さんのオリジナリティ溢れる料理を食べることになる。味付けにはさほど問題がないのだが切る煮る焼くといった基本に難があるからわりと苦痛と言ってしまうと苦痛なのだが、毎回毎回ちゃんと進歩をしているから前の酷さがもう一度、とならないのがわりと面白く毎度の成長を感じながらであると被虐趣味とも言えるような楽しみが変わってしまっていた。

毎回毎回香奈さんは「食材をダメにしてしまっでごめんなさい」と謝ってばかりなのだが、その度に母は「卵を割らないとオムレツは作れないのよ」と有名な言葉を引用して慰める。決して味付けのセンスが悪いわけではないので、順調に料理の腕を上げていく香奈さんは食材をダメにする回数も少しずつ減っていくようになり、それを見た父は「一つのドアが閉じれば、別のドアが開くというやつだな」とこれまたどこぞの名言を引用して嬉しそうに笑う。

香奈さんが使うことになる部屋の大きな荷物を僕と姉と香奈さんで運び出していたある日、姉がちょっとした買い物で外出したとき香奈さんが僕に「他人と一緒に暮らすことって、嫌じゃないですか」と聞いてきた。引っ越しが少しずつ近づくにつれちょっとずつ不安も生じてきたらしい。僕は中高と北関東で寮生活だったし、他人と一緒に生活することが嫌いではない。たまにふらりと出かける一人旅ではユースホテルのような相部屋のことを多し、僕自身は気にならない。そんなことを説明し、それより、言い方は悪いけれど年頃の香奈さんこそ僕みたいな男がいる家で生活することに抵抗はないのかと前から気になっていたことを尋ねてみると「そういう嫌な人じゃないのわかるからいいの。大体私のこと女性としては意識してないでしょう」と返された。正確に言えば香奈さんのことを女性として見ていないのではなく、女性をそういう目で見ることができないだけなのだが、そこは隠して笑顔でごまかしておいた。父母も姉も、僕のそういうところを知っているから香奈さんを受け入れることができるのだろうし。

ただ、僕や姉はたしかに香奈さんを他人としてよりは家族として認識していたというのが確かなところだろう。母とやたら気が合っていたというのもその一因かもしれないが、香奈さんは我が家の雰囲気にとっても馴染んでいた。あたかも家族ぐるみで付き合っていた家の娘さんで、ただご両親が亡くなってしまっただけ、とでも錯覚しそうなくらいだ。

両親を亡くしてから決して楽ではなかっただろうけれどその雰囲気を漂わせることは今までに一度もなかったし、亡くなった両親の話になっても気落ちするところを見せたこともない。もちろん、一人でいるときにはそうした感情を発露させることもあったのかもしれないけれど、そうだと僕から見れば彼女はとても強い人だった。僕らが実の両親をこんな若い時分に亡くしたとしたらどうだろうかと思うと、彼女のタフネスに相当する何かを僕や姉が持っているとは決して思えないし、その点では彼女は僕らとはまったく別のタイプの人間だと言わざるを得ないのだが、それを差し引いて考えても彼女は我が家の空室に収まるべくして収まろうとしていると言えるような気がする。

香奈さんが卵の黄身を潰さずに割れる確率が7割を超えるようになった頃、北海道から香奈さんの親戚が挨拶にやってくるようになった。9月に入って最初の土曜日、午前中のフライトでやってきて、昼過ぎに香奈さんの叔父と叔母は我が家のテーブルについていた。長辺に並んで座る両親と、その向かいに座る叔父と叔母。短辺には香奈さんが座り、僕はテーブルを眺めながら今のソファに腰掛けていた。

別に重たい話でもないし、終始話にはこやかに続いていた。僕も何も気にせず彼らの話を聞くとともになしに聞いていた。香奈さんの母親の兄にあたる叔父が、生まれてからずっと北海道にいたからこうして都会に出てくるのは何回めだろう、というような話をしていて、午前中バイトで出かけていた姉が帰ってきた。

こんにちは、と姉が挨拶をした後に叔父さんがあの一言さえ言わなければ、と今でも思う。

「若い頃の京子に目元がそっくりだ」

叔父さんはそう言った。叔母さんは本当ねえ、と応じた。

簡単に言ってしまうと、香奈さんの母の若い頃の顔に姉が似ていたというだけの話だ。聞き流しておしまえばそれでよかったのだ。他人の空似なんてよくある。僕だって泊まった宿で「君、前も一緒になったよね」と言われたことがある。似ていることなんてよくあるんだからそこで話を広げる必要なんてなかった。少なくとも僕は今でもそう思っている。

話はそこでなぜか盛り上がり、香奈さんの母親が若い頃このあたりに住んでいたこと、そしてこのあたりで香奈さんが生まれ、中学まで暮らしていたこと。両親が亡くなり、高校時代は北海道の叔父叔母のもとで生活していたが、都内の大学に合格し、どうせなら暮らしていたあたりで生活したいとこの街に来たこと。僕らは香奈さんから聞いており知っていたことだったけれど、叔父さんの一言で場が盛り上がり、そのような昔話を花を咲かせていた。ただ、このあたりで香奈さんが生まれたということは知っていたが、香奈さんと姉が同じ病院で生まれたということは僕らも知らなかった。

同じ病院で生まれたということを知ったあたりから母の顔から明るさが消えていったのを僕は知っている。

その後1週間くらい、母は何か悩んでいるようだった。たまに香奈さんとこっそり話をすることもあったし、何かをしている

なというのはわかっていたのだけれど、何をしているのかまではわからなかった。

10月も中旬に差し掛かろうかというとき、我が家で暮らしている香奈さんも含め家族5人が居間に集まっていた。父母が集まるように言ったのだ。

結論から言ってしまうと、香奈さんと父母の間に遺伝的なつながりがあったということになる。そしてそれは自然と、姉と父母の間に遺伝的なつながりがないということの意味していた。病院での取り違えがあったようだ。ようだ、というのは今の所遺伝子鑑定を行っただけでしかないというだけで、どうしてそんなことになったのかの理由は調べないとわからないらしい。

母がなぜ、遺伝子鑑定を思い立ち調べたのかもわからないし、何故その事実を僕らに教えてしまったのかも僕にはよくわからない。何か思うところがあったのだろうし、父母の間でも色々とその辺については十分相談をしていたのだろう。その事実を告げた後「でも、あなた達姉弟はそれでもやはり私たちの子よ」と続けていたが、そんな言葉が姉にとって慰めとして機能する可能性があるのはこれから何十年も経った頃だろうということくらいは僕にでもわかった。

蒼白になって言葉を失った姉の横顔は、この世の残酷さが今目の前に広がっていることを克明に僕に伝えていたし、しかし僕はその残酷さを推し量ることはできても見ることはできない。

姉は目の前の父母が遺伝上の父母でないことを知ると同時に、自動的に遺伝上の父母をこの世から失ってしまった。僕には相変わらず父母が目の前にいるというのに、姉の目の前にいる父母は、そうではない。

こうして冷静に捉えることができちゃうこと自体もしかすると姉の目の前に広がる残酷さの一部分なのかもしれないが、姉は誰を恨めばいいのか、誰を罵ればいいのか。そんな感情すら生じないくらい姉は何が起きたのかすら把握できていないのかもしれない。そう、結局のところ僕には何もわからないのだ。震える姉の左手を握ろうとした時少しためらってしまった僕の心の中の何かも残酷な存在かもしれないし、姉の右隣で俯いて涙目になっている香奈さんの存在そのものも残酷な存在かもしれない。そして残酷と表現していること自体妥当ではないのかもしれないし、僕にできるもっとも適切で妥当な姉に対する態度は、わからないというニュートラルな感情の域をはみ出さないようにすることだけなのかもしれない。

父母は、香奈さんの叔父叔母にこの事実を伝えるべきかどうか悩んでいたし、その判断には姉の意向を最大限尊重したいとも思っていた。事実は事実として存在するけれど、事実だけが全てではないとも。事実だけが全てではないというのはとても落ち着いたいい結論—香奈さんにとっても僕らにとっても父母がいるという落ち着いたいい結論—かもしれないけれど、落ち着いたいいというのは僕や香奈さんや父母にとってだけで、その落ち着いた良さ自体が姉を苦しめる結果になるのかもしれない。

僕らは5人とも押し黙ったまま姉の眼前に広がる世界を共有しようとし、それと同時に僕や香奈さんや父や母それぞれが思う素敵な世界に姉を招待しようともしていたし、そして当然5人が5人とも自らの眼前に広がる混乱を内包した現在の現実と向き合おうともしていた。

共有された沈黙が淡々と時間を消化していく中、姉は一人立ち上がり「少し一人にさせて」と消え入りそうな声で告げてから居間から出て行く。

姉が居間のドアを開いた時、空気が動き、別の部屋のドアの閉まる音が聞こえる。